

北京の イエ 月 チエ 季(ばら)

高木徳一



ここは北京のカラオケの店で、薄暗い中、左手の火傷の傷跡にむしやぶりつき舐め回す日本男性

チャンリーメイ

の白髪にじっと見入るのは、張麗梅であつた。

幼児期の火傷は醜く、二つの瘤山を作り、夏でも薄い長袖で隠し続けてきた。麗梅にとつては、

これが常に心の中の八割を占める。小、中、高校時代に、何かにつけ消極的になつたのも、このせいであつた。自分の運命を酷く呪つた。母の不注意で・・。母のバカと幾万回叫んだ事か。ボーキフレンドが出来ても、傷を見付けるとどうしたんだと目をひん剥いて声高になり、無情にも去つて行つた。過去からの心の深い傷を、優しく癒してくれる人が目の前にいる。頬を思い切り抓つた。痛みを認識する。神様が巡り会わさせてくれた男なのだと感謝し、この時間が永久に続く事を願つた。ダンスに誘われ、フロアーに出る。四拍子のスローな流れが癒されてゆく心を包み込んでく

れた。彼の厚い胸板に小さな顔を押し当てる。一曲、二曲と・・。ミラーボールの反射鏡が彼の端正な横顔を照らす。肩を抱かながら席に戻つた。互いにグラスのビールを干す。心の傷に染み渡るのを感じた。独学で勉強した片言の日本語で話しあげる。「中国には何時来ましたか」と。「去年三月に。東京から北京に赴任して、もう一年になります」とのゆつくりした中国語が返つてきた。「奥様と一緒に来ましたか」と問えば、「否、この歳で独身なんだ。大学時代、好きな女が癌で亡くなつて・・。それから何と無く結婚せずに今日まで来てしまつた。何回か、お見合いはしたけどね」の日語の発音に、内容は七割程度しか理解出来ないが、彼の目にキラリと光るものを、麗梅は見逃さなかつた。心根の優しい男だと直感した。

「まあ、可哀相に、好きな女が死んだの・・。私が北京の愛人（アイレン）になつてあげる」無意識に出たこの言葉に、麗梅自身戸惑つた。

愛人と言う響きに、立花信一は引つ掛つた。不倫関係がイメージされる。自分は未婚だから彼女が既婚者なのかと。

「結婚しているの・・」「してません」

そうか、彼女は未だ日語の語彙が少ないから、恋愛関係の事に違いないと一人合点した。

ポンヨウ

「恋人は居るの・・」「いません。朋友（友達）はいますけど」「嘘だろう。恋人なんだろう。水商売の女は恋人や夫は居ないと皆言う」「本当です」麗梅の目は純粹であつた。

信一は清泡ビール合弁会社の営業部長として、一九九八年三月、北京に单身赴任した。

翌年一月の今日は、全国営業所の所長会議が北京であり、その懇親会後の二回目に誘われて部下六人と来たのだ。信一は一次会で皆にけしかけられ、白洒とビールのチャンポンでしこたま飲んでいた。頃垂れながら、質問を発する。

「君は二十四、五歳と言う所かな・・」「そう、当り。一九七三年七月三日生まれで、二十四歳半。七三七三で覚えやすいでしょ」「そうだね。七五三祝いの五抜きで、一度聞いたら忘れられない。誕生日には何かプレゼントしよう」「まあ、うれしい」

「俺は幾つに見えるかな・・。当ててごらん」「そうね・・、四十五歳かしら」「お世辞だろう。白髪がこんなに多いよ」「でも、顔の艶がいいのですも」

の」「五十三歳だよ。君のお父さんと同じ位かな・・」「父は六十二」私は五人兄弟姉妹の末っ子」「そうち。それで綺麗な顔に甘える様な所があるんだ」「まあ。きれいだなんて。きれいじやないわ」「そんな事は無い。俺の好きなタイプの顔だよ」と信一は言いつつ、白いほっぷに厚い唇をそつと押し付けた。麗梅は彼の手を強く握り締める。

「もし、気が向いたら、この名刺にマンションの電話番号を書くから電話してくれ。土曜の午前中は中会話のレッスンが有るから、午後がいいな」

「ええ」と麗梅は頷き、挙げる様にして名刺を受け取る。

立花信一の文字がぼんやり見えた。裏にして、ローマ字でたちばなしんいちと読める。彼の部下達は思い思いに歌つたり、一人でダンスをしたり、カツプルで舞つたりしている。片隅では熱い抱擁場面もある。信一は音痴だが歌好きで、野球で鳴らしたリズム感は抜群であり、当時中国でブームとなっていた千昌夫の『北国の春』のカラオケテープを日本から持参し、毎夜練習して飽きが来ていた。中国語訳も家庭教師から特訓を受けたが発音が難しく、完璧では無い。残念ながら日本版はこの店には無かつた。再び、麗梅の細い手を取り、ホールに誘いステップを踏む。何時の間にか彼の両手は麗梅のくびれた腰にあつた。彼女はそれ程飲んでいないが、頬がピンク色に染まり、妙に色っぽい。

「もう、十二時になる。明日も会議があるから、この辺でお開きにする」

信一に了解を取つてから、でっぷり腹の突き出た

チエン

陳北京営業所所長が皆を見回し、中国語で叫んだ。

麗梅は名残惜しい気がした。帰り際、誰言う

チヤンシャウチエ

とも無く、「部長！ 張小姐（お嬢さん）が帰

るの、送つてやつて下さいよ」の声が星空の下で上がつた。

「そうですよ。部長のマンションと同じ方向ですから」と、口々に何人かが流暢な日語で言う。信一はチヨツと照れ臭かつたが好みの女なので、その言葉に乗つた。皆にはやされる様にして、小さな赤いタクシーは走り去る。信一が麗梅の右手をギュッと握ると、直に応答がきた。

「中国に来て、今夜は一番楽しい時を過ごせた。こんなに可愛い女に会えるなんて夢みたいだよ。本当に有り難う」

少なくなつた車のライトが広い六車線のポプラ並

木の道路を行き交う。見覚えの無い家並が一気に通り過ぎた。

「この辺で降ります」「そう。また、是非会いたい。

君の電話番号は・」

麗梅は、「こちらから電話します」と言う。掛けら

れると、不都合でもあるのかなと、一瞬、信一は考えた。もしかして、旦那が居たりして。内ポケ

ットの財布から百元札（一元＝約十五円）を一枚取り出し、手に握らせた。「いいです」と麗梅は押し返そうとしたが、無理に彼女の指を折つて札を包ませた。「ありがとうございます」との言の葉を乗せて、甘い眼差しが返つて來た。店でチップとして二百元を渡してあるので、追加は要らないと思ったが、作戦として気前の良さを見せたかった。昼の弁当代は十元前後なので三百元はかなりの額である（但し、日本料理は馬鹿高く百元近い）。

翌朝、信一は目覚めると愛人なる言葉が鮮やかに蘇り、簡約現代中国語辞典を括つた。第一義的には連れ合いの呼称、二義的には恋人とある。不倫をイメージさせる意味は無い。前者の意味で使つたのだと勝手に解釈し、気持ちが高ぶる。味噌汁が胸を更に熱くした。

チヤオヤンル

一方、信一と別れた麗梅は京広ビルの前チンクワーン朝陽路を東へと歩き始めた。

車が歩道側に寄り、麗梅が外に出た時、信一は軽く投げキッスを送り、後ろ窓から彼女が見え無く

なるまで見詰め続けた。マンションの大理石の柱が立つ玄関前で下車すると、月光が闇を照らしている。部屋で一風呂浴びた肉体は心地好く、ベッドで今後の展開を夢想した。

の奥底からコンコンと湧き続ける。街路樹は寂しげで葉は殆ど無い。しかし、麗梅のハートの樹は幸せの葉で光り輝く。生まれて初めて味わうこの感激。信一が狂った様に傷跡を舐めまくつていてる姿が、瞼の奥に鮮明に映つた。

(ありがとうございます、信一さん。あなたは私の心のお医者さん。コンプレックスが夜空の彼方へ猛スピードで飛び去りました)

黒ずんだレンガ造りの十五階建てアパートの入り口に着いた。エレベーターは夜の十二時から朝五時迄運転停止なので、九階迄歩かざるを得ない。外階段を上る。長い影も何時もの不吉な物と違つた様に思えた。

(信一さんは日本に妻子が居て、自由気ままに遊び耽つてているのだわ。ダンスも上手いし、口説き文句もしやれている。そんな男に夢中になる自分

が馬鹿ね、ね、そうでしょ、お月さん。答えてよ) 上弦の白い月は雲間から顔を出しているが、無言

のまま。

静かにドアに鍵を差込み、回した。友を起こさない様に抜き足、差し足で入り、ピンクの花柄模様のネグリジエに着替え、梯子を伝い一段ベッドに昇る。布団に潜り込むが、中々寝付けない。今頃、信一さんはどうしているかしら・・・。グーグー、寝ているかな。それとも、私の事を思い出してくれているかしら・・・。こんなにも素敵なかいを演出してくれたなんて、神様、憎い。思わず、掛け布団を信一に見立て、口付けした。生まれてこの方、感じた事の無い鼓動が全身を震えさせ。押さえ付け様とすると、反発するかの様に胸の高鳴りは一段と激しさを増す。仕事の疲れも手伝つてか、何時しか麗梅は軽い寝息を立てていた。

最初の土曜日がやつて來た。週日は朝方二時に寝て九時頃起きるが、休日は十一時頃迄眠りほうけている。今日は何故か九時に目が覚めた。休日

なる単語が前頭葉に現れるのに少し時間が掛かっ
た。未だ眠つていい。信一の影が覚醒中枢を刺
激しているのに気付いた。良かつたら、土曜に電
話して欲しい。是非、掛けてくれと言つた別れ際

の言葉が、信一の白い歯並びの映像と共に浮かん
だ。会つて話がしたい。彼の事をもつと知りたい。
楽しいデートを味わいたい。欲求はエスカレート
するばかり。何時しか、朝食も摂らず、歩道にあ
る半円屋根の付いた公衆電話の前に立つて、

唐草模様のハンドバックから信一の名刺を取り出
す。手が小刻みに震えて彼の名を床に落とした。
膝を折り、拾い上げると思考が頭の中で膨張し始
める。日本人に会つてどうなるの。弄ばれて、い
ずれ捨てられるのが落ちだわ。でも、片思いは辛
い、辛過ぎる。恋人なんて、所詮、無理な相談な
のね、この傷跡では・。

追い討ちを掛ける様に、もう一人の自分が喋る。
現実はそんなに甘くないわ。電話をすれば、そう、

そんな事言つたつけ。大分酔つていたからなど、
断られるのが関の山よと。
俯き加減でとぼと歩く麗梅の後姿があつた。

それ以来、彼女は信一への思いを追つ払うのに
躍起となつた。店にいても、家に帰つても、彼に
会つた不運を嘆く。会わなければ、こんなに苦し
まなくとも済むものを・。この間は、信一との
出会いに対し、最大限神に感謝したのに・。
それが今では逆に恨むなんて・。自己矛盾も甚だ
しい。人は悩む為に、この世に生を受けてきたの
か。あれは夢、幻だったのだと考えれば、気が休
まる。故郷に帰れば、遠い思い出になるに違い無
い。出来るなら、そうしたい。しかし、出稼ぎの
目的は、たんまり貯め込んで少しは両親に仕送り
する事なのだ。三年目の今は月々五百元の送金な
ので、物価の安い田舎の教師の月給が七百元であ
るから、百姓の両親には大金になる。一体、どう

すれば良いのだ。心は張り裂け始める。こんな事では店の仕事にも身が入らない。思い切つて、アパートで同室の王小鈴に相談した。

（ワンド・シャウリン）

「悩む位ならば会つてみればいいのよ。素敵だと思えたところが、メッキが剥げて幻滅を感じる事だつてあるし……。棄てられた時の事も考えて、これも仕事なのだと割り切つて交際すればいい。

しつかり、小遣いも貰つて」と、事も無げに言う。

「そんなんじやないのよ。優しい態度が好きになつてしまつて……。彼の中身が知りたくなつたの。

これつて、恋かしら……」「知りたいつて……、言葉もよく通じないので。細かいニュアンスなんか、

到底判りっこ無い。まして、文化、習慣が全然違うのだもん」「一緒に居るだけで、心が安らぐの。

そうだが、心のドクターとして、付き合いたいうのだもん」「うじうじしてないで、一か八か、電話を掛けてみたらいいぢやない。気が済む様に」

朝餉の米の粒が唇の手前で止まつた。彼女の一言に、麗梅は意を決し、食事を早々に済ませ、外に出た。公衆電話のプッシュボタンを押す指に迷いは無かつた。「もしもし……、私は張麗梅さんです。立花信一さんですか……」と、胸のドキドキを隠しながら、日語で喋つた。

「……、ああ、君か……。ずっと、連絡が無かつたから諦めていたんだよ」

まさか、色々悩んでいたとは麗梅は言えない。第一、そんな言い回しの日語も知ら無い。

「今、何をしていますか……」「何をつて。昼飯を食べて、テレビを観てる所だよ」「日本のですか、中国のですか……」「勿論、日本語の番組だよ。今日、カラオケお休みなの……」「ええ、そうです」電話線の向うから、少し甘えた様な音色が伝わり、信一はデートの約束を取り付けた。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。